東清外伝

一編

五

へ 13
2891
5

へ 13
2891
巻 5

景清外傳 松の操

巻之五

東都 絳山戯編

第八回

粟津乃濱より奥婦賊より掠めらる
湖水の沖ふ義男賢を欺く

斯くて夜も明んとせし比鐵より外の方強く人の叫ぶ声もれば景清
不審思へ共忽ち門戸叩くものあり。いそぎ立出て見るに。おのゞ
戸佐人郎等のいと慌忙たる抑るを見て。門を開く程なく入来。何ぞありて
遠く洲本へ人来るぞと問へば郎等息を御。案じとゝ答へ。修のとゝあへ
いらぬ。さても義仲勝に乗じ。昨夜叡山に登り今朝洛中に攻入る
なるとゝ。沙汰しきりなり。平家の門一門は。天皇及び建礼門院二位の
尼を携へまいらし。西国の方に赴きたんと。新の強勢大きなれば。父忠

七月廿九日 購求

清盛殿もうたれ兄上も供をして既に立出のみなる。世にし告まりしかとぞ無く。是非ぢやなければ端にや世にも景清は一くも告しめのならぬ我今に是非べし。汝ハ未だに其後父と兄とあれ仇せよと。郎等が選らしめ急に季勢を得ぐ立入りける。今郎等が告るを聞て事危急に及び云り昼夜よりて人まつじる妻子が忘れくも足下を数とまのらもとえ。さるべとむかり云まて。是まんともろ処を季親もちや阿古屋母子五十奈さんも諸ともにこれの替府と止むまで耳にもかけど一散に六波羅さして馳去ぬ。是斯伸より。兄ゆるかざりへ望しかど。今ハ遥に隔りて。つへむとのまゝ阿古屋母子伏沈みて嘆けるを。季親声をあらくげく。ある浅猿の阿古屋が武士の妻として打ちもまふく其嘆ハ何ぞ。るぞとく仕を遂し。夫の身乃為見るのことを討らへまでと励を

に阿古屋ハ母らしく身を起し兄の手前をもぢかまく泣じと忍ぶれバお母のくふ。さふり落る涙の玉双乃袂は濡しけく。まくと忍び音に泣出る弟人丸阿古屋が背を撫て。此夜祖母君や伯父君の宣ハせしに父上ハ母ぐく罷と来まふを相どふおとなしくまつべしと奴家に仰へありしそバ我楽しに待るに母うへも泣ど給ふと幼童心によろこぶ母の泣顔ハ屢も憂愉ハ袂の見るめを憐まなり。阿古屋ハ人丸を仰のりもめの道理ぞ去らぬ子ハ丸母をいとゞ不便さと膝にかきのし抱上め。まくさめぐと嘆きける。五十奈もおろし涙あらく。伏沈みて居たりしが。やをら面を上あげつゝ阿古屋よ人丸のいふと我よく紛の事幼稚なれども父のなと明らめく居るあるに。ことまよおんなる知らへむや。夫の軍の門出に。いまいましくも泣あひる。同頃よ似気ないぞと云励ませど優曇華の相見ることも少なるまじと思

つゞけ〳〵ぶむ涙をぶ。袖よりあまる程憂ひ。側よりそる同式ぶたく。事新
もぶ〳〵ぶ和らく。さ〳〵俯ひく居るとぶ。彩〳〵ぶ果〳〵と言語式正〳〵母子
の嘆きも爾るとぶのぶ。今まも敵の来りるべ。擒とるのぶく奈何るのぶん。
憂国よ達ふも知るべくんぶ。速よ世ぶを立退きて。身を全して時節式待
国出度對面做べ〳〵と。いうもぶ母ぶ人ぶと。結ぶ慰めとぶらゆるよ。実爾ぶり
と阿古屋母子。心をおさめく〳〵やとぶ。宣うもとと道理ぶ爾ぶ何方へう
立退べきぶ。ぶの教よまらせぶと。ぶ式拵へく作ぶる。季新ぶ式又ひく
云。兎角新辺ぶぶよ害のあらんぶとぶ。逃げゆく〳〵とのけぶ。
尾張國ぶ生國ぶぶ知音もヨヌく。身を寄ぶ所もあるぶとも。我
も長田の庵流ぶり。孫倉の怨ぶ源ぶぶ。彼ぶ石式抱渕よ
踏ぶと春日よ。氷の上を渡るぶり。尚も危くあらんぶとぶん。家景清と別し

ぶ。辺ぶ迄の老籠の表よ。ぶ住居ぶ居ぶ。少ぶ知ぶる人ぶ。
一まづ彼ぶよ立寄ぶ。思ひく時節ぶ。ぶ式ぶ。
ぶひく阿古屋母子。俄よ旅ぶの順ぶ。
さ〳〵く急ぎけぶ。此時ぶ正よ寿永二年七月九日あまりのぶりけぶ。
木曽左馬頭義仲ぶ。北國よ兵ぶ挙ぶく。平家と数ぶ戦ひぶ。いつも勝ぶ
ぶ。平軍ぶ破〳〵ぶ。今年七月。賊ぶの國府ぶ立
て辺ぶ四夷知河ぶまぶく攻登ぶ。先陣ぶ三上山の蘇野河ぶよ陣式
取不日よ。ぶぶ攻入るとぶ。ぶぶ。かぶぶ。ぶ式ぶ山門ぶ。衆徒も。木曽ぶ同
心ぶぶ。ぶ仲五百余騎ぶ。天台山よりぶ登り。總持院ぶ城
郭とぶ。ぶ式眼下よ入下〳〵ぶ。責入るぶ〳〵と搦ぶ。ぶく。ぶ勢ぶよ
向ひぶ。平家の大將とぶ式ぶ。ぶよ思ぶ。ぶく一門ぶ

兎角由なしとて京に引返し勢多に向ひたるに。新中納言知
盛の卿ハ僅五百余騎の勢にて。粟津の浦に陣をとり。一戦を遂らん
べしと備へ立たる所なるに。源氏方のなかに。加賀国の住人大田倉光と云ふ
ものありけるが義仲叡山に陣しけるとき。先加はりしと数千騎の軍兵を
将て粟津なる浦の方をさしてよせ。知盛の陣をとらんとすると。知盛さて遂
ふとし戦ひ入て数とこかまと五百余騎を一手にして進み返し
戦しが寡の衆に敵しがたく。遂に平家打まけ今ハ力及ばずとて
通家みな落行退けぬ。大田倉光ハ軍に打勝て勇み勇んで叡山の
義仲の陣へぞ参りける当時に長田季則伊勢十三と姓名改めかへ。
京家の侍の杵に打掛所古屋冊子を相具して。粟津の淵に来りしが
しが今倉義乃暑中なりしかば世を迯るとて人ハ跡を見し一まづ都へ帰り

還り道の用心を致すて旅ゆくべしと思案し。立戻んと云ひけるが。乱
世の当時にハ野伏山賊四方に起り旅人の命をとく。群賊強盗の
ものありしが今回も賊蜂起しく。粟津の里にも多かりける。十三も其処を
行たるも我心なりしも。彼処に只ある林の下にぞ忽ち一群の山賊
行途夜遁りとなり。十三郎独で。急に五十奈に生捕ひく。阿古屋
親子を伴ひ木陰に隠し己出て賊に対ひ云へりけるハ院乃
北面なり。院ハ木曽殿の陣に今夜こそ討せらるると聞て妻子を具して
院の在を木曽殿の陣に来りしもの没ず対ひ云れせバ忽ち宗
と受べるぞと悟りし山賊どもハ呵々と笑ひとも云はん。院にもあれ北面
にもあれ家門がのかけるに世の因になかるなるべし遁すべきやある由
なれど述べし。相具したる女房と身辺にある金銀を渡さずに

あハつ
栗津の
貧ま
あに
阿古
屋や
きえん
賊難ま
逢ふ
阿古屋

十三
十四
八九

去べよう。爾らぬ忽ち閻王の廳へ送り屠くべしと飽まで欺さ云へりける。
十三熟ことれをえるよ容易く恒後ゐるべと思へば鞋のうちそこうんと。
ゐるべ〳〵害を遂ふべくなれば。不如運窓天よまりし洲のうどもを斬散。通人の
と思へ悟しつ。あるる愚なる山賊よいでや波木を閻王のmおよやうんよ准倣
せてのと云ふとなれば〳〵腰刀をぬくとうへ〳〵ぶと先よをこ生る山賊を。
二断とくく刀を奪し。彼る賊へまつ走ぐらよ脱因もみるまど切くかるべ。利欲
ふまるる小賊ども。若のうちのこを懲まふ迫へ合して戦ひ〳〵。武義よ熟せ
〳〵十三が。必死の太刀の尖まて。因たく間よ三四人。梶とうべくれそり。
とうよ和て山賊ホ。盗も命のあるてこそ叶へ。ものと喘ひ佐刀を引く
逃去を。何方までもと追く彩。阿古屋駒子ハ木陰より。背尾霧ひて
居くり〳〵。此光景賊ゐるうちのの兄上よ十三との。爾だるを言く

追ひひ七ゐ失ふべ後悔そと声をかく〳〵く制る後よ。ものの山賊三四人。
現出生く牙をあせる。阿古屋駒ひとと投へ彩ん。とまる賊毋五十奈。
ゐハこをを止ぶ上引止るを。一人の山賊ゐ武あげ。力よまる跳倒せば鳴と一
声叫び〳〵。その間よと盗賊ハ去向も知りまど逃
失たるとの知らまど十三ハ山賊ホを追散〳〵。ゐく〳〵返〳〵ゐて。ゐる。
五十奈ハ倒ゐ居る例ゐ。人九ハ伏佐居れハ〳〵〳〵奈何と五十奈を抱へ声の
限ゐ呼甦せば。五十奈涙ゐく伝佐を。十三賊ゐ〳〵〳〵涙を流〳〵ゐ。十
三どの娘阿古屋ハ山賊よ奪ひとらゐ。ゐて十二歯切しの。嗚呼
ちゐ〳〵たゐ。ゐ念や。ゐ伝賊くし〳〵く。山賊のゐる欺ゐ姉を奪ひゐ。
いで追ゐく。ゐ戻さん。と矢ゐ。ゐ五十奈ハ止め。何方をゐ。と弁方ゐ。
何賊的とて逐ゐ。とハ坐ゐ。ゐ人九も又ゐ失

あらんには、ひそかに付まとひ、阿古屋へも知らしめのうへにて、心よく命をとらするまじ。ひまあるに稼がるゝ、世にも居へ悪うはなし。奈何方へも猶ひかひ左右に辞めし。阿古屋がる所の外寄の人と、いつまでも十三郎やよ。心を静めて思惟しみ我細て己おもひかへそり、もんをふ言路道理をとく、此地方を立去らんが、兵経雲軍兵満てたり。後途ハ山賊群居たれば、進退此所に極まれり。奈何とも詮方ぞなし。ところ此痛居る処に、浜辺の芦の繁みより、ひとつの釣船の波に流て来て岸に着たり。十三郎これを見て喜びて、天の与へる船ぞかし。いざまへやと人丸を背に負ひつゝ五十余歩を引て、船に乗せたり。唐崎の方へ漕出しが、彩夥と殿上のり。二艘の船の追跡ありて漕来れるが、見つまるも最早追かけにおよばずと急に芦間に船を漕入れ、暫時光景を窺ひ居る。此方の北目を見かけるに、まづ甲夜暗の空曇り、ふりまさへそぼふり出にけれバ、一夜を凌ん術なくて疵痛むる

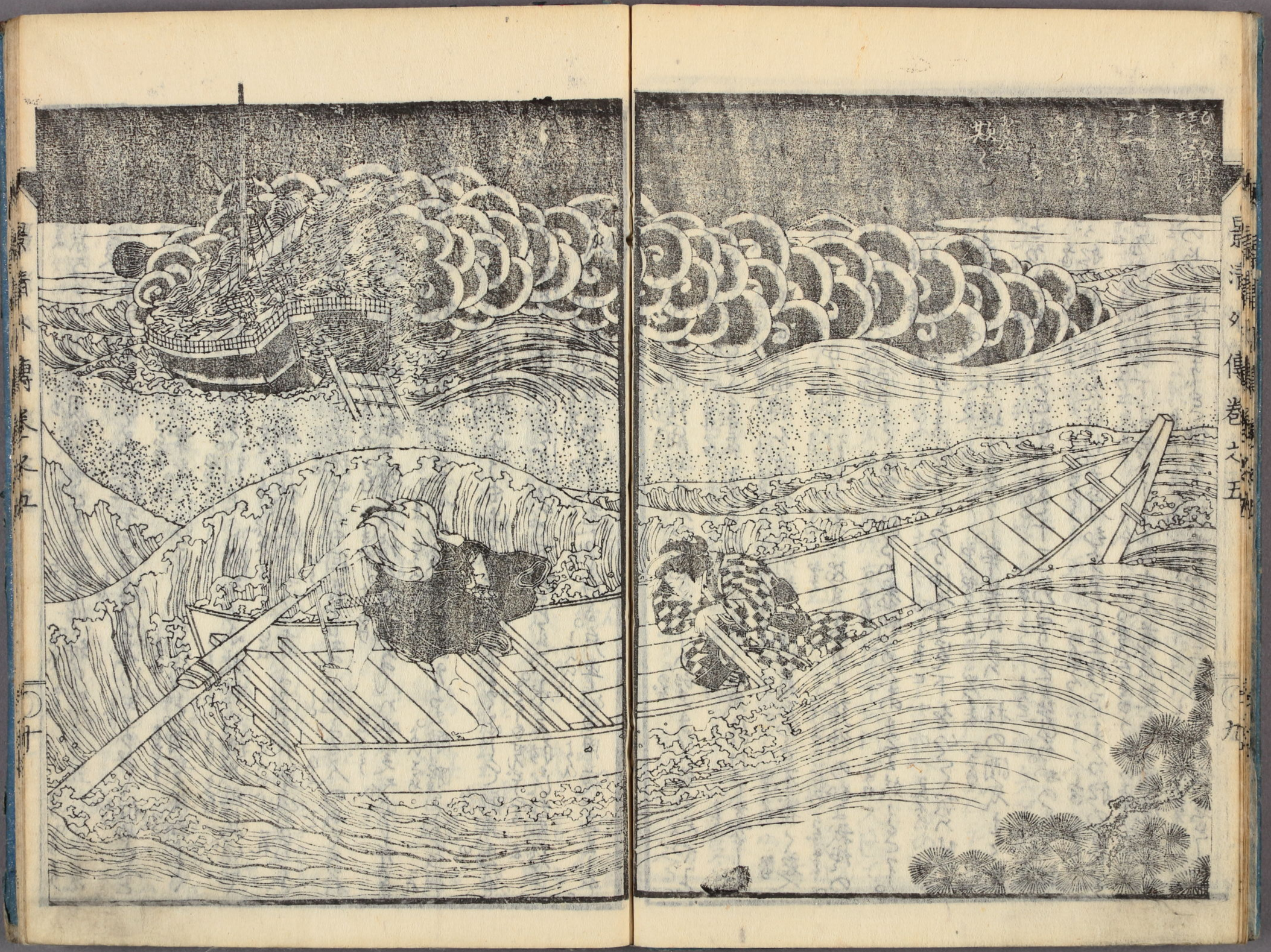
折からに。只今の船にては来ぬれど十三不審がり芦間に在りて密に窺ひ居たるに聞ゆる其声は、舟の裏より。やゝ夜叉のごとき大漢子皆ばしひかき立現れ、三国の客人居たるかと呼わりけるまゝ、舟の舟より商人めきたる漢子立出、栗津の兄弟の物まくの、女ハいかゞに言ふものと、回意ハ呵々と打笑ひ、欲のは礼もあるきものか、今夜ぞつ運び付ハ宝屋の土産にいふべきに、蘭るはなくてさまつ来るに銭ののぞみしと言ふらん。此女ハおしくとも金ハ惜しくなきもの。扨、蘭あれ一旦関東の女ハおもハ見まゐべしと、女の手を取りて引出し、女、女性こそ此年頃都にも名ある白拍子、阿古屋の君にましまさんよく拝み奉れと松明さし照らしつゝ見せたるに、三国の客人熟々とたがめつすがめつ見て、しか忽ち手を撲地と打ち、道理あるかな道理なり。かほどの美人にあればこそ、我まちむ三国ところまで其名聞えてく好めしぞかし。蘭といども此女の悪景清といふ荒ものが。

妾として居たれバ途方にくれ。只あきれてぞ居たりしが今回の乱れに母ともろともに入んとの娘しさよ。必竟これも木曽殿が軍に棟ゆれし故ぞかし。平家にハ摂政にハ福祥なく。おそれも此間縁に粟津の兄に暇なく金まハりせん女まで這程金ハ手に入と。首に懸けたる搭膊にある數の金など算へ侍ぞ。紙に包く手にとれバ彼方にゐる女をして這程の銀に家稼をかせ二人均しく銭拘て去らバと云て濟かる首尾とあくせ十三ハ窮ひ起さまして蜜かに五十奈に對ひて云ひけるハ今彼等銭つかふのかうめ正しく阿古屋と年し給ハバ銭返して棄返さん爾ハあれ動く逐紛るがおんこや人丸舜とゐるに始ぐてのあるる人なれバ彼所にゐてある唐崎の明神の社にまゐり侍ん。明日ハ阿古屋を相倶しく。還まれん程に待のる人といふに五十奈ハ我を殺さく明日まで奈何にして唐崎の社に忍び待ん路にて我止めよしくよく

縋つきくかなぐどしもあ矢欤だし去のひそと云ふに十三喜びて慌忙く櫓をおして舟を岸辺に濟寄すれバ。五十奈ハ予ぐく甲斐〳〵しく。人丸を抱き陸に上れバ去らバといひつく十三ハ阿古屋を乗せし船を漕去ぬ。飛がごとくに漕行き。今さらに阿古屋を乗せし舟の主ハ誠ぞ尾張國二國といふ所の戸平次といふ娼家なり。扨て阿古屋が遊女となりし縁をふさぐに諸る人の如く思ひけるハ奈何もしく嬬女を儲ひ我家の妓女とせバ富家の少年入来り。不圖我とゆんあの我と騒ぐ國戸を執る迄ども。阿古屋ハ景清に忍びて子までなしけるよろしハ儀ふと叶ざしと云ふしたるに節を失ひ今日までぞゐたりける。這回木曽殿の勢ひ強く。都に責入るゆゑに平家都をたまりかね西國に落べしとて。景清なれども之に従ふに。益無く六波羅にまゐり阿古屋が

舟へ入のりこまんとすれば戸平次は教まをたる四戸どもへ対戦はしと急ぎ戸平次が舟へ乗移り。阿古屋と棄丸と共にはしり。今日迄は為る我家ひ途は行つけく棄ひとり。戸平次は貴こそせる。戸平次は日比の望こ今日遂こく。心中頻こ喜び。射戦早めく射ある。敵辺こるこしく小私一渡矢を射るとく漕事まとり。是則十三こそでありう。間辺くこまこび声とあげ。そのいと私こと三国こる。客人のめーまこあくるどや。ホーくヤ笑やべこるの行まこび事ホこ。それビの上ーまこ上ーまこ。いくみ戸平次、立那是。是下へ何方の人はて。家ホ何の用らある。今騒ぐき世の中こ。ある新まぬ人へ上ーがこと漕く戒心微体こるまこび。十三ホこ縁をとりけ。今宴ホ道理こる。まくのへ甲斐の強あんこホ女を愛後せ。栗燈の兄が貴入茅刎こ金武物こまーぶ。ホーまこくまこぐるうう。拾戦めくるも意毒さこ逃ーまあと見るのが。兵庫へくまこ

程ホ。世あこ捜へ来ほしあり。強納めるへ上ーまこ。ホ戦はけて茅ーぶ。ホこるまこくく戸平次、参ひくく。家嘉ホどもぬけめるく。ホ戦はけて茅ーぶ。奈何ーてる強こまーまこ。ホこ搭賜を改こるこ。弥数の遠ひねび。いと不審く怒人ども。彼方こるまーくホる稲を結ぬへ天の怒まーあり。と強欲のホこ我俺の。道理戦はけて。ホ戦実ホ。偽戸くく云へりけるホ。茅刎ホあまるこ嫉ーまこり。茅へ金の数を茅へ強り。ホくまひくくまるこ。ホこ下をくく。ホへ世ーまこ。まこ世私こ来ひくく。金を返ーまこ。辛苦代ホ一杯の酒戦まこ。ホ戦まひくく。ぜん。と云くこ笑こ彼こ西るホこ。十三ホくくと喜ひこ。ホの上ぶ私こ。戸平次ホ舟の艫こ繋ぎ。ホ戦ホ。ホこ上移こ。まこ私の裏を窟ホこ阿古屋戦へ帆柱の下こ居くーまく五六人茅後左右こ囲繞せる。ホこ。ホこ因人のやく。逃ーまこ。偶然こーく


鎌倉十郎傳卷六
五十九
鎌倉十郎傳卷六
五十九

言ひかん光景ゐる銭十三八貫銭めてとま袂に袖の裡より五枚の金を
出し戸平次が前にさし延ゐけるにどれ程の違ひもなりしとよ仮めぬ金と
いふ戸平次金銭改めて不意の幸を悦ることよと喜びく酒呑る銭出しく
養息せバ十二世も辞せまじく引受て飲めども数杯の酒銭継けつゝて
酔ゐる伸ばへそのまゝ寝床に倒れ伏射る母に寝ゐるに戸平次ハ忘れを
つきハよく去しかんと云えいわれ死せども回向もなし。死さる人のやくあれ
ば景をもて言へりけるハ洲白痴が醒る銭給ぶ夜明るんハ心定えようやくと
酒銭振舞て。との災ひを惹出せしも今の後悔も益なき酔醒くのものに
狼といふともまだ未射よ欺く事もあるべきまじ。とのまゝなして船銭出せ。
て帆を揚よ櫓銭あせといそぶしたてて下部をまだ水主船頭ら急かく。
帆を揚櫓銭あし只顔ゆ銭茶の方へ走らしける。戸平次も甲夜よりまして。

阿金とともに一身の程。阿古屋が居る所に一斗の酒をば呑べけれども心も労れて且
十三は強くなし。酒はさしも酔ぬまで家内のもの皆居睡しも漸く小酒の酔
そもそも今は堪へがたきやうち臥て。鼾鮒々と熟睡まで従者は素より酔けまど。
の睡るまでと思ふ時は主の戸平次も罵りて鞍銭のこと忘れるほど眠り因
を揺へしうち。其の痛をこらへ弓とるにも今ハ帰る方なしとものがなまめくうち
伏しふるまく鼾の音高く熟睡してそのまゝにける。十三ハ素より酔てもなく。
縁の中で陽酔熟睡の体にてうかゞひさりしが。今戸平次を首として従者一人
として寝入ゐたり。此光景を窺ひて縁の方の蜜にて居たり
かへり。阿古屋が側によりて耳に口をさしよせ何やらん私語ぞ。
阿古屋も起て。女房ともに立って艫の方へ忍び出れバ十三傍への衣
をとりて着せ火の火を消し。身を潜めつ苫の下に。ざし竿より艫の方へ

殺とおれば忽ちに火入の笠よ殺つるく燃こと。燃上るぞ。水主弘長これとうて。
あるに猿ゝや世ふよ火の燃出くるどや。人こ生く消ーるとと喚叫べべ戸平
次へ酔ゝたゝくどこ豆戒。忽ちがゞと起ぶと。世付網業全滅ぞ。殊更
線ぶろけたる豆ぶ。火の光の赤く元中るのゝ何とのゝ戒弁へねど。弘長の弘よ
火あること。叫び声と伝のまふ。たゞ慌忙くのゝあのゝあげく呼叫び。やよ
うのどもへ何方よぞ。火ふ弘の燃ぶ。[illegible]よのぞう火とのて消さるぞと云
とさえを者どろゆく。彼方よ走り這行の池ゝ。弘裏を巡ゝ狼狽ふ時
てとよーと十三ハ阿古屋ぶ戒とう。[illegible]。最者の為ふ花後王。樽を
ーきろく逃走る戒。知るのさうふなりけり。

第九回

旅客沢く怒ゝ戒賊夫よ報ふ
狂女打て援と主家ふ得とり

且説十三ハ阿古屋を奪ひあよ乗ゝて急ぐと矢戒射るとくるれば。皆付の
間よ逃よ逃の。少ゝく乙ゆきれば後背の方を顧ふ戸平ひがあの火
も消ゝくとおゞくて。火光ひと為ゝさくゝ色るふ。とよたゝくゝ十三ゝ。
乙安堵て阿古屋と對ひ。栗津の浦ゝて賊よ遭ひ阿古屋と別邑后のゝ。
五十奈人九を唐嬢ふ。ゝ亜て船を逐ひ遂よ亜戻を者ぞ。いと
細ゝふ語り名ゝ。阿古屋ハ伝ゝ風ゝ。奴家賊よ
集れて。何ゝとゆくゝ。若犯ゝ弘ゝ忽ち入戒縛ん と。光
悟極ゝく伝ゝ。ゝ弥蘭ゝふ。只能浦辺よ伏ひ別。ゝて船よ
うち乗ゝて急よ漕出ゝ。ゝ。ゝ越前国三国ゝ。
戸平ゝ。ゝ。ゝ婦家の。ゝ。ゝ船よ移遷て。奴家戒彼よ愛復せ。
ゝ。ゝ奴家と婦婦ふせん。ゝ。ゝ精ゝれば。ゝ海底のゝ。と

あり。果てんの武とさとしえべ。戸平次とれを押止め。船の中に居りて。世も動くばかりねべ俗とえうくて泣居るまゝに不思おりて敷ひまり。と互に憂と語りあひ唐僧の浦に無武差るに。時夜八ものぐとゆふけ。さく二人の船ゝ上り。五十奈人九と奪るに武二人の甲冑ゝ拾て今の渡辺に出まれば四人同うく出舎るまぞ。互に敷そのうゝ人九阿古屋と云こゝろ。のふ母上よと云ものふ母上と嬉しうぞうさけ。五十奈ち阿古屋ら差うく。還に敷ゝを敷べ阿古屋も母と我子とふ再舎ちと敷びて。とれひとに十三の弟計よりとそひ泣ぬ。光景を細ゆふ母に渡に知らとめぞ。五十奈と武感佩く。そ才武妻優を敷とれに十三八三人の女性武相俱く。世地方を立出く。東辺に巻也ちうさ。老尉森に立越しぶ。さうそるにさ空蟬のあるく。わどふ。とと武

繰ひ求ゆく。暫時とふ居りけるそれども明白に月のうく武。世ふゆのくれ八悪うるとと思景清のけりうるとに沈く包まく十三ち。長田と云ちゆうさ。ぶりけと。不在給下再説越前国三国うる。娼家戸平次八阿古屋か笑顔女ゆく。今様の舞妙ちうる武強く俊つれべ。さる女を乞ゆく我家の。娼妓とせが義がふ。利沼武ゆんと云ふ紗より。渡辺を国戸ホ。数を敷を亜れど。景清よりとられく。今八子まぐ渡けたるべふ入るうの雖く。そひなちて。あるとうる不よ今年木尉の乱よより。平家物を義るうう。雨あれべ忠義の景清も。妻子を捨く平家ゆ後ひ何方までも逃くべくと。国戸仲間の悪渡よ。墨清の兄とうくれたうぶ。そひ泣いく戸平次よ。阿古屋武棄ひ憂八とを告ゆりうるべ戸平次。とても泣ちまね花ちうとそひあるうの居ち丸よ。俄ふ仏告武ゆく大よ敷び。狂花咲そひを。義ぎ逃の琵琶湖よ。

船式走らし来り候。彼の船中に居る者共に尋ねるに、船中に居る者共に奈何と尋るに、甲夜に金を拾ひ取り、男を殺さんとすれども、さて其者は阿古屋茂兵衛殺害し、四戸の我を縛り、妻たる女我を棄ひ返し、又彼に妻子一人とりく矣くの食物なんとする。彼の悪漢共、我が挙動を見て我を三回に戸平に入れ、人も知る男なるに、彼ホに熟く欺き、男を殺し、女を奪れ、いろもあり、選らるべき。彼の悪漢に時に、我を縛り、人の妻子の多列るに、容貌美き女性成べ見形を奪ひ、外出。行却強盗横行し、金銀貨財を奪ひ、越前四三ヵ所。戸平に入り、媚家に百金に賣後、一時に大利成り、我を早めく選ぶ。仲間のものと欲ひの順成列く居るに、九たるの小年と、十七八の小女と、地方に来りしが、我を近づく。野州河に住のものなり。

ふるあくそうろうれという悪漢どもはとも成るとの貌さ若かのるが。男は病後とぶしくて、痩衰くて、

まる一件の怪しき挙動であるけり。時今私とて、盗賊四方に蜂起して、人の妻子財宝を奪ひ、殺害するのみ。さて悪漢の我を縛り、我身を利きて方に入れ、彼栗澤の悪漢に時に、我を縛り、人の妻子の多列るに、容貌美き女性成べ見形を奪ひ、外出。行却強盗横行し、金銀貨財を奪ひ、越前四三ヵ所。戸平に入り、媚家に百金に賣後、一時に大利成り、我を早めく選ぶ。仲間のものと欲ひの順成列く居るに、九たるの小年と、十七八の小女と、地方に来りしが、我を近づく。野州河に住のものなり。ふるあくそうろうれという悪漢どもはとも成るとの貌さ若かのるが。男は病後とぶしくて、痩衰くて、

繰ひく。二人と船の長さ　幾丈不詳。男と海に投入女と少しき財宝をそ
奪ひてうとの所に置り。再び友我は生ひ長ひ長ぶと限るく。改めきたく男が云ふ
船者ふ所方角紙上に。戸平次に書く大利とる。今や彩生宝を得ぬるの
うを不思議なれ。前ふまして人の久宝船ととるのあり。ゆど賊とて一人とる。
再び酒宴をなすに。その女性へ何ふ。奏ふ乞してうんうん。西北方へ
強ぐく。あをうくう北西のうちに書ることをあれととるくゆて家まくぬる。
中船の比に至れば白孟へ何ふの地方も。軍ふの所ふより。船人とるの強くく
ふたび日の暮るまぐ船に乗れば何方へも行んと。栗浦の浦の芦間ゆど。
船を漕入とふび多。山附三ふの戸平次へ頻に船を急がれど。折ふ一向に風に
ふて。そがどうぬるふを焦燥。力と岡ふれど行きぐる。此時ふる西へ
ふくく。天色いと悪くとふ。彼の平ふ色とく。暴に風烈しくあり。激

浪ふくあり。船に入水。流上に流下に。今ふも此ふ要後ふ。いと
危ふ。人とふける。戸平次ふ多後者さふ。色と乗ひこふ奈何に何方へふりと船
船を引くたく船掛と叫び罵るだかりに。船掛も力を抜ふ。櫓を盗く撰て。
千辛万苦紙多とふ久ども。その甲斐さふ乗ふ久ふ。今ハ十やかりと光
悟紙くふ。戸平次ふも船と知れば船に乗ふ。
身ふも麻木く泣だふ。唯こふくうを見ふ久ふ。船風の荒きに。既ふ波日に
及びぶ。夕暮の頃ふに至り。漸ふ風も止んとふれば浪も安穏ふ。
とある岸辺に着ふ久ふ。鶴ふのそひ紙に。此ふ何ふと船より上り。熟
又ふ久ふ見。則唐崎の浦ふくあるふ。今船より浪の烈くて。着る衣を
濡ふ法ふ久。焼火くく乾ふ法ふ。そのやあるとふ不通をう寄ふ。
九日ふ夕ふ田夜ふれば。ふと闇くく捜索ふ。ふも衣をや濡ふけん。

四三人がほど集りて。焼火に衣服乾きゐたり。戸平次これをうかゞひて其人と
傍んと立寄れば。折から吹来る濱風にちらと焼立火影にうつりしは。小豆科んや粟津
の悪漢一人の女を傍に置て抱擁て居たりけるが。戸平次女は阿古屋と
見て猛然として怒気発し。言葉も交さず躍りかゝり。抜手も見せず悪漢を一
刀の下に両断となし。さしもの命を取りし悪漢なれども。不意を討れてもろくも
ここに命を落せしは。悪報とこそ知られけり。戸平次は勢ひにまかせ尚残り居る
悪漢を逃さじとて斬かゝれば。日頃はさしも豪強く名を得たる者どもあれど。
思ひがけざる事なれば慌忙き散々に四方へ逃て失にけり。戸平次は猶も其ぶつ
從者等は促逐ひしが。其向方を見失ひて立戻りつゝ女をこなたに何方へ行たる
けん。ここに居よと女の足もとへ寄て行ども四方を尋ね来るに。遂に見えざる
ものなし。今は甲斐なしと立還り。強欲なる戸平次なれば茶に斬たる悪漢の

屍の懐を捜索し。財布を尋ね出しけるに。昨夜阿古屋を償し。百金の黄金を
其まゝあれば。かぎりなく喜びてこれを収納ければ。戸平次は甲斐なき乃
労に二時に出再び女を尋んとせしが。從者に對ひていひけるは。我
欺れ汝に買ひし女を奪ひ返されしは。無念千万なるに。今其の賊を
切殺し。女は行方しれず。僕の百両の金を取戻せり。然ては我に欺れし。恥辱は
ここに雪ぎたり。されども女を取逃して。これまで来つる甲斐なし。かれが以前
護まゐらせしも。彼が捜索は我身の辛苦せざるべからず。必ず是非今日
より其の行衛を尋ねまゐらすべしと。勇心ともに労果たり。頓て此人々を尋ねるとも。なる
べきものなり。我今回の損失は容易ならざることなれど。汝等が苦
心辛苦を憐み。大慈悲心もて帰国せんこと我いかにも家に還らば粉骨して
業務を励み。我今回の損失を助けよ。其海あをぐ恩に報ふべしと。第一の

上恩を忘れ、人の沙戒壓なる。強欲心を沸騰し、渾這回の一件、戸平次は
あつく狐換失を。阿古屋を百金あつく買、既は阿古屋を奪ると
ひとども。惡漢を殺しく百金を奪ひ、百金を全く元戻せり。又越後の
此地方へ来れり。旅費はさるなれど。十三ヶ所の五枚の金あり。是ゆく尚
余りあるべし。彼のうち戸平次が中は弁へ法ども。後者よりこれを
後来邪道は使ふとも。辞まとを。さ縁めく。却分らひしるなくへ。えく
貪欲の人の仏が懲めの方なれ。後者へ主の仏知ぐ。いつはかりて
憂恤ぬと。かばりあく恥じく。碧の蓋ぬを間は。船の糸よと我儕の慌性
くもこと。ありぬ戸平次は船後使ひ。たて帆を上し。越後さして還けり。
若は強絞まる。小年と小女とが。見捨は。おあく危難は遭へ男を
水の捨ぶ。女へ賊は集まるが。石幸の兎まる。奈何なる人ぞと云ふ。

男へ本田二郎とて。畠山庄司重能が郎等なり。女へ賊機とて。これは妻なり。
畠山庄司重能へ年頃平家は奉ぶ。是二の忠義のあるが。這回平
家の一門残らずおちぶれ。後へ主の仇を討ぬ。忠
義の極を感賞あつく。汝が子供を東国へあつ
を。人の親の子を。いつの。甲斐へ。あるまかり下る。
親子一緒は栄枯を拾ふと。強は眼を泣く別れ。
金を下るける。本田二郎も主の供して。同く吾妻は下る。
ると病めり。が。武州後は肝れ。後
ひ遠る。東は下るとは。光未の。尾は一筋は
角は。孫は。老やせん角やせんと。武痛居る。本田が妻へ
賊機とく。迫は岡野川の産まれ。畠山重能が家は仕へ。

容顔美麗なる人。なぜ雄と考えるのうれい。年紀七十五歳。情こ。遠代の家子本田二郎が嫁なり。夫の本田が病を助け。故郷なる野洲川へ伴ひ行んと。新戒出要法の浦まで。来るこの常時阿古屋を奪ひとる。悪漢どもの此方へ居り。一を拉捕るのと。人塔り。仮新戒を。ひく上ること。如し。水心よりも。陸戒家人。本田二郎が。新戒を。ここを水中へ投入たり。絹機は。新戒ひく立。新戒を捕へ。絹機と。とも。が奪ふく故の。新戒。還り。斎の間へ。芦間へ。隠れ。新戒へ。至る。伴ひ連れ。東国方へ。赴んと。推備をする。折から。戸平次。あが。此賊。忽ち。力下の鬼と。なり。也。残る。絹は。逃失たり。此。絹を。捕へ。我夫の。死。こと。絹機。と。を。此。へ。入水せんと。絹が。素。捨。新戒。松が。元。あり。おろかなる。増戒。ち。たそ。こ。志。方へと。新戒。喋せど。増戒。たびる。ひく。一。新戒。こ。の。く。羅。絹。あ。も。

堀へぬ。分。とひく。到。もあるぬ。増戒。押せば。分。とも。が。労。を。果。今。は。世。も。働き。ゆるぐ。増戒。捨。が。ひ。ひ。ひ。く。分。の。為。命。戒。惜。き。く。が。絶。入。れ。ども。絹。あ。そ。と。れ。を。抱。せ。ど。いと。も。情。の。光。景。に。新。を。風。よ。つ。を。涙。の。あ。が。まが。流。を。こ。ご。果。は。大。津。の。浦。よ。ぞ。け。を。浦。人。へ。に。を。戒。に。く。に。平。家。の。為。人。ら。ん。捕。へ。く。源。氏。よ。後。ら。ぬ。恩。義。ゆ。ぞ。預。ら。め。の。ぞ。や。と。の。く。浦。人。が。新。祖。が。絶。入。し。。絹。機。を。捉。へ。引。出。と。。自。哀。る。ら。が。絹。機。は。夫。の。列。を。あ。泣。し。れ。よ。既。よ。絶。入。た。を。る。戒。今。浦。人。よ。引。立。ら。を。。偶。然。と。く。れ。ば。き。し。が。遂。よ。れ。れ。ん。捉。へ。し。人。を。左。右。よ。衝。退。け。。ある。悪。く。の。絹。よ。ぞ。う。奴。家。が。夫。を。。湖。よ。義。し。人。ら。ぞ。。と。く。戻。を。ど。し。戻。て。よ。。夫。を。達。と。や。る。ぞ。。畠。山。が。あ。れ。う。ち。ゆ。く。人。も。知。を。る。本。田。二。郎。ぞ。。が。く。源。氏。の。代。と。ら。ぶ。。て。よ。汝。ホ。貴。戒。別。代。達。よ。掛。並。人。。を。恐。怖。と。ひ。ら。ぶ。我。夫。生。く。戻。せ。よ。と。分。代。哀。へ。し。く。

大津浦
有能
有能
有能寺

あつれ
嬢山
横山

罵りける。彼方此方と狂ひ走れば里人ハ奥ざましさてハ此女狂ふぞ。源氏
方の人なるべく。夫ハ落去と乱れ狂ひとおびへさり。今此女ハかんらひ。
り。怪我もさせとゞめぬが。奈何なる者ハ夫人も知らず。彼しらら人此地方を去
もふ志とゞめぬくハ欺き尉が居たりけるとふ畠山重忠が家ハ
小山田別當有重といふものありける。兄重忠と諸ともハ年比平家
ハ仕へしごとも平家都落ちの身の眼ハ物まつれがたくあはれにおもむく
べらぬを最愛の女房あるしが相倶しく下らんとく何ぢよとものとし
らゆるふ恙ひのおハ隙どりて兄の庄司重能よりまし遙ハおくれて都ハ
生ハ當附ゐ上ミ大津の駅ハ經るハ里の童子の口とハ物狂ひハ狂人よと
番とし後背ハとり囲み云罵るハ有重ハ奈何人ぞと立止まり伸上りて是を
見るに兄重忠が郎等の本田二郎が妻なりしが。とやいふらしく狂ふらん。

嫁故ハ彼のおもや。狂ひ纏ひ居る里人ハ至て履歴ハ同ふまじべ。あまりしとを
回意ゆきときてハ本田が紙の為ハ爰ハまり不便なり。此女の紗様しく狂ふ
どうも持く狂ひゆくぞ。さまざまふ思ひがひしとて。里人ホハ嫁故を語りくれの里
しく謝識を語りくとて下りける。此話ハ智体再説伊場十三八門石巻親
子を相倶しく老者森ハ居たり。ひとり浮世を思び居たりけ。然ハ三人と
養ふ居るがゆかしく見ぐ。且ハ世の神心ありしが。老若杜の遠近き。
越知川ハ出て發ありし。かくそき便ハ謹とも白紙を望と構るハ
つりの比より此者の阿房ハ一人の乞食ありて。その容貌さもながら
狂しかども去りあへて清らかる壮夫なるが。病ハハ倦りく紀居もかみなどいと
哀とげハみえざれどもハ十三これを憐みく。おのが餉を分ち与へ且菓などを
も服させとゆぞ。壮夫深く恩を感じ。添ふとおもひる。斯て漸くと病愈今ハ

歩むかどもありけれバ一日十三に對ひくやせし。素不幸にして世をひにし
かり。御様しきを夜にうつゝは浮世に情ふかく。かくなる上は病重るにつれび
はたバ今日故郷に旅発なり。若天運にかなふ由し再び世にある人となり
すバ鶴恩報ひまゐらせん。ばしめの事をつゝまれ由縁あることある世の恩
び。あふまでとそを覚へたまへ。それまでの事もおいて名をんとする十三を。
ことバ止て云つりけるハ必ず名告まゐらすべからず。それ素弥惻隠の心をもつて
做るならバ今日ハ報ひ受ん事ありしバ足下が名を何の為に
うらまべきぞ。それとても生るうち。我業まさるものかなしきバ浮世にせらるが
いふでに落魄の身となりしさまバ秋名も何人知らざるぞ。足下が骨相をみるに
ふまぐ春秋に富たる上は眼中の尋常ならず。後ハ必ず昇進をとぐべし。
我ハそれより引続く年物老ふ返ぐのゝ。才拙く身徳しくまだ世にまがいて

天年を終るのみ。幸とまを尋ぬ人世の移ろいなき。今日足下と別るゝに
又再会も計りがたし。幸とふ一瓢あれば此酒汲交て名残を惜んと腰にさげ
たる瓢を出し一杯を汲てさしければ壮夫喜び感謝してこれを引受飲
けるが。是より頻に盃をかさねしほどに十三も壮夫もともに酔ければ互に興に
乗じて来しさまざまの浮世の事に今古得失の談に及びしに十三の云ところ
道理明らかによく古今に弁じければ壮夫深く賞歎し。小膝をすゝめて
云けるハ前刻よりつねに身を伴ひとしてども足下ハ尋常の人にあらず。俗縁隠し
給ふ包む君子にぞありける。御身らはいまだ今に源平の勝劣を素
ならして示しまへと聞まれバ十三はおほそ左右をかへり。我浅才の拙き者
の。いかで右左のことわりを弁ん。前へあまり足下の忠心に何で人の一言成も
申述ねもれなかなか人に修るときかく僅に一二を云ん。そもそも清盛

[library seal]

時運の廢。海内の兵乱絶ること既に九四年に及ぶ。とは小松内府重盛の
ゐ。賢ふるものゝ世人後に幾程なく。物忘れさるを。ゆゑに絶て幸を
の賢ゐること。絶猶〳〵是日本国中ぼ〻ゐる。平家の任国ゐる。九四年の澤を
蒙る。民豈少ゐるべきや。雨るゐ僅一朝ゆゑ。民悉く叛て四方敵となる。
平家の二門奢る耽風流繻飾をもつぱら。詩歌管弦に絶潤ら。家代正の法も
ゐる。四家に力を用るものゝ多れば民疲使ゐ嫌ぶ。あるべしとのあまたし。
ゐぬものゝ多れ折ゐる。故に源氏義朝の子。蛭小島の流へゐる。報恩僅に起ると
雖。四海ゐる源氏に左袒し。平家の微弱制まると紅ゐど。一門西海に逃遁を
折のやきの勢ゐく。いづれ復古の功を成んや。惜哉平氏九類世侍に亡び失て。
永く家名絶ぬべし。天兵法曰。天下安〳〵と雖ども。戰を忘るゝものは危し。
てや暴悪驕奢の平氏ゐるを。壁へ舉陶伊尹のやきを。名臣あるとも爭ぐ

亡びざるべきやと。或は怒り且は歎て。涙を流し〳〵く語りける。壯夫賀て嗟嘆し。
先生の言実に爾り。平氏の絶る所以をば。未だ詳らかに悟り得ぬ。さて孫家の
ゐ。ゆゑ奈何あらん。預くは〳〵と。絶も幾の人十三歳にて。始て兵法を
しぶ。ゆゑ。あるべく。ゆゑ。れ。報恩のこと。絶報ぜるふを。人を知らざるを。若悪是非
を弁ぜども。情ゐるを。武人は口ふ蜜あり。腹に剣あり。よく物を忍ぶる人ゐ。
流石の勇をあらく。武を好ぶる。輝し。平氏を西海に走らしたる。その孫畧
猶ゐ知るべし。必ず功を全ふ〳〵く。天下を節制まるふ至れ。おそらくはその心
ざし。剣為横氏ゐ〳〵く。現愛少かりんと。絶。豆下報恩に仕へゐる。范蠡子
房に倣べし〳〵と。絶ゐる壯夫嘆伏し。先生は當世の伏龍ゐるを。才ゐる仕へ
ゐる。封侯の富絶子孫ふ伝人。ゐどや。絶隠し名を埋草木ともふ老人
と志ゐる。惜しても尚あまりあり。と云ふ十三完尓と。人各命あり。及べぬ

富を求る人。風を仰ぎ畏れ捕へ風を迎ひて揮を振ひて。勇しく遂めんべう
らぶ。ゐるく禍を願まをり。五難戒避て山を戒友とし。天年戒保んぜるハ。
楽しきことを揚りのほ。とうちゐ物語ふ秋の日乃。つと縋くく陽の西に
臼傾く時。そあを栖こかゝる村烏群ゐて戒遶ふ中り。日ハたゞ暮れ
ゆ迫づけば。我も古栖ふかゝるべし。さべと云て立去るを。壮夫暫附と留むるを。
祢戒拂こく代ふ事の今操ひ揮を盗らし。流ふ後ひ漕去るを。とふ十三と
物語まる壮夫ハ其性名何とゝ。そハ下回ふ分解を待べし。

景清外傳　松の操　巻之五　終

○前川文榮書閣新刻略書目

圓陵宮田先生著

皇朝戰略編　半紙本全八冊　定價金壹圓五十錢

此書ハ天慶の始め平の將門が亂と東國に起せしに始り近く寛永の末島原の賊徒西海ゐ殊滅せられしに至る迄前後凡う七百有余年の間名將、勇士、公戰、私鬪、豪傑、英雄、奇戰、妙略跡の法則とゐるべきを數多の史乘より撰ミ出ス武學の用に備へたる者にして實に兵家の龜鑑たるべしと云つべし名將の勝を製そる術を覺り國家興廢の由る所以を知るべき者は此書に如かず

照陽高見先生著

續皇朝戰略編　半紙本全五冊　定價金七拾五錢

此書正編の世に行なるゝ日月に盛ゐ然れ共未近世の戰略を記するに至らぎ故に先生新ゐ續編の著あり其記そる所ハ文化年間魯西亞人の入冠に起り大壟れ亂鳥關鹿兒島の砲戰大和及ひ生野ハ戰ひ水戸正奸黨の亂長防の役戊辰の初伏見淀川の一擧上野の戰爭甲、信、武、總、野、北越、奥羽、函館の諸役佐賀台灣ハ征討朝鮮江華島の捷ゐ至る迄大小の諸戰を記して洩すことなく陸海軍諸公の英武勳功谷鎮台の偉烈等詳かゐ記載せり若一回卷を繙ゐ手の釋るに忍びざらんやす四方の君子幸ゐ顧み收く其奇書たるを知り玉ふべし

清原重巨先生撰　清原重光先生校

草木性譜　附草木有毒圖說

奉書摺大本全五冊　定價金三圓

該書ハ山林田野に生する草木、花實、葉根と微細に寫眞して毎書着色其眞を顯し目前實物と觀るに均しく加之記そるゑ滋益・有毒、氣味、性分を舉げ和漢に名稱出所と詳述したるは百物推理の方今與產家と始究植物試驗藥劑驗別及ひ製藥家ゑ於て此書其參考ゑ闕くべからさる要書也

丹陰莊門　熙先生編輯

新編詩學精選

小本全五冊　定價金七拾五錢

此書ハ四季及ヒ雜部に五卷に分ち上ハ日、月、星、震、風、雨、霜、雪よりと下ハ江海、山川、森羅萬象、宇宙細大とおく凡ち吟味に屬する作題ハ勿論晩今祭典、瀛船車、電信等其尤も新調に適する珍奇雅正の作題と附して洩そよとおし其體裁たる紙面を兩段ゑ野別ゑ上段に熟字を掲げ下段ゑ韻礎を置き毎題和漢名家の絶唱と稱する作例を挿み且つ平仄譯假名と叮嚀に註明す是を以く刊行以來詩作梯梯の良書と呼ハれ江湖ゑ流布するゑと既に萬有餘部の巨額に及べり重刻そる再三編者の榮譽書肆の僥倖深く感謝する所おり伏て冀くハ江湖の本書新識の吟客其誣言おらざるを推し最寄書房ゑ就て御購閲あらんとを企望す

丹陰莊門　熙先生編輯

新編續詩學精選

小本全六冊　定價金壹圓五拾錢

此書正編ハ四季を主意とし編次す故ゑ他の景物ゑ至りては漏泄の失あらんとと恐る是ゑ因て天文、地理、人事、器賦、飲食、草木、百花、菓品、禾蔬、飛禽、走獸、鱗介昆蟲の十三門ゑ區別ゑ其體裁と專ら正編の義例に倣ひ只管ゑ作例と增し下段に後輩先進の五七言句及ひ聯句を掲げ置たれと吟場墨圃は勿論書庸雅筵に提携すること便利に ゑて其功最も多し實ゑ正續兩編連理して無瑕完璧おる良書と云ふべし凡そ詩作に志ある諸彦の清玩とせば其攀援の助を爲すゑと少小おゑず伏く請ふ世に慢然散布する詩作の諸書と同一視するゑく卷と繙て其金玉おる全本と知り玉ふべし

竹涯莊門　熙先生編輯

詩韻含英異同辨增補以呂波韻大成

折本銅鐫全一冊　定價金拾五錢

此書ハ從來世に流布する以呂波韻より一層字數を增し冊首に時令及び花木、禽獸、鱗介の異名を載せ次に詩韻含英異同辨より平仄韻字若干と摘要し只管に詩作初學士の便益に供す世上に類書數多刊行し就中異編同名有之此書需めらるゝ諸彦と莊門熙編輯の以呂波韻と稱へ最寄書肆にて御求を乞ふ

阿陽堤大介編輯

一辭千金　詩文幼學便覽

横本銅鐫全二冊　定價金卅五錢

此書ハ四季の景物花鳥風月等の部類に分ち熟字若干と掲げ平仄譯假名と丁寧に註明ゑ實に詩文幷用の便益に供そること聊か表題ゑ不違珍書おり

明屠赤水著　東溪源謙校

考槃餘事

白紙摺明朝綴帙入小本全四冊　定價金七拾五錢

此書い支那歴世の書畫古法帖等の評論及び金石鼎玉文房の諸品盆栽瓶花香爐茶酒琴服等一切の事物載せ洩すことなし且い其品物の眞僞精粗を辨論し或は製作試擇を修飾との諸法を參記せ實に文房賞鑒家必用の書なり

順堂奚疑先生著

書畫皆宜

白紙摺明朝綴小本帙入全三冊　定價金四拾五錢

書家必用の小冊諸君子常に机上に備置き玉ふて其の辨用擧て謂ふ可からず書題畫題と始と一絶句聯句い云ふも更なり堂亭又は館園の別號數字類ゐ至ても諸家の妙語を選て漏さず記したれば該書と披閲く其自在を得ずと云ふことなし苟も書と玩ふの諸彦必携有益の書なり

吳縣顧祿鐵卿撰　日本名居安原寛得泉校

清嘉錄

半紙本全五冊　定價金七拾五錢

唐土の年中行事其國の風俗人情と詳載し民間の景物と結す學問の助となり詩文を作るに甚だ益あり

宋林洪著　元羅先登著　吳縣顧元慶著

正續文房圖贊

白紙摺明朝綴大本帙入全二冊　定價金五拾五錢

○附十友圖贊

此書い支那歴世の文房諸品筆墨硯紙等より茶器香具の文房に屬ぜべき器具百般其圖式を摸出す雅文贊辭を載せたる珍書にして文士雅客と更なり賞鑒家にも必用の書なり

近藤守重編輯

金銀圖錄

半紙本全七冊　定價金壹圓五拾五錢

此書い往古より近世まで我國通用の金銀貨幣其正品と摸し品類を區別し着色して凹凸とも其まゝ顯したれい實に其眞物と視るゐ同く且位格時代年月相庭等と詳記したをと銀行を始め經濟家有志の必閲たる書なり

南陵富永贛撰

茶器名形篇

半紙本全二冊　定價貳拾八錢

此書は聚樂窰の家祖吉左衛門累世の系譜其造る所の茶碗及水指香爐花器等の圖と擧げ其傳記幷に價位を附し購覽主の姓名と記して遺憾なからしむ苟も紹易の下流を汲む人は必ず其座右に闕可らざる書也

秋山仙朴先生撰

當流基經大全

大本全三冊　定價四拾錢

此書は本因坊策元の直傳と記すもれゐしく諸家の聞書圍碁石置け必得より都て秘傳妙術と惜まず記錄しかれと圍碁を嗜む人は勿論假令ひ初心の人と雖も此書に據るときは置石定位の法を知り變化勝敗の理とさとり易く所謂定石しらずの域を速脱するの善本なり

丹陰竹涯莊門熙先生編

墨客草園

白紙摺明朝綴帙入寸珍本全五冊　定價金壹圓

抑も墨場に携帶して臨摹に充る書多きと雖も草字と集めて雅趣け求索に適するもの少し夫れ書は古人け筆法ゐ據らざれば一點一畫筆を下すも婉雅なふを況んや草字ゐ於てをや編者此ゐ見るあり是を以て歴世十朝(漢、晉、宋、梁、陳、唐、宋、元、明、清)草聖の古法帖中最も純粹なる者に就き片冠の引法よりて編纂しく六卷にしなし墨場必携の用に供す乃ち古人を一堂に聚め手に執り心ゐ談ぜるの快をゑさしむる書ゐして例之ゐれを學とさるも幸に愛玩し玉は、家雞野鶩の俗體て脫し老顛狂僧の風神に入るも抑また遠しとせず是に於てや謹て江湖の草韻家に告ぐ

移石原田先生摹古及加筆

國書芥子園書譜

半紙本全二冊　定價金五拾五錢

方今文苑畫圖の書冊皆ゐ机上の簡便と競ひ江湖に刊行するもの多しと雖獨り國畫の書に至ては未だ完全無闕なるもの蓋し多らざるゐり今斯畫圖の如きと古今我邦畫工の巨擘三十餘名家の揮毫ゐるものを蒐輯しん物草木走獸飛禽百花魚介の六譜に分ち只管に唐刻芥子園畫譜の躰裁に效ふ之に慮をて學

べは初學の士筆と下して其礙滯おきに至らん假令之を學ざる君子も幸に愛玩ぞたまゝ鬱憂心を轉じ爽快の情に移らしむる珍書あり

越谷吾山先生輯

諸國方言物類稱呼　半紙本全五冊　定價金七拾五錢

右越谷吾先生我日本國中經歷の際其土地の風俗人情より一郡一邑の訛詞迄委しく記載ぞく天文地理人事服食草木花果菜蔬飛禽器賊獸魚鱗介昆蟲及言語の諸門ゑ分編して間々名家の諸國訛詞入ぞの唱歌狂歌連俳狂句等を挿みし古人未曾有の珍書あり

大廳永常先生著述

農具便利論　半紙本全三冊　定價金五拾五錢

此書ハ耕業に益ある諸器械を集錄し其便利を評論して近來流行のポンプの製作までも載せ記したれハ農業の諸君に欠くべからざる寶書あり

天狗房花鹿大人編輯

佳花餘薫珍珍文粹　寸珍美本全一冊　定價金拾五錢

戲作者の巨擘馬琴京傳春水三馬等の諸先生と始め三十餘名家の最も面白き文章を輯めし小冊子ゑ倣したれハ狂文を綴るの御手本とおるべき小意氣ゑ書也

狂歌堂四方眞顏大人閲　狂歌房酒月米人大人撰

四季戀雜狂歌題林抄　小本全四冊　定價金六拾五錢

江湖諸大家の狂歌を東都ゑ名高き狂歌房主人が撰ハ其上へ題毎ゑ枕詞及ひ珍詞ぞ大寄に掲載せられ去頗ゑ滑稽がぞたる古今未曾有の珍書中の珍書おれぞ世の風流粹客達是非一部ハ御進め申ぞても御求めあらんことを乞ふ

契沖阿闍梨家集

漫吟集類題　中本全四冊　定價金七拾五錢

契沖阿闍梨ハ歌道ぞの大家ゑるゑ其道に遊ふ人のよく知ところなり此書ぞ契沖阿闍梨の家集ゑして四季戀雜幷に富士百首長歌等各々類選にしく一代のよみ歌を洩さぞ五千餘首をあつめし大秘書也

富草屋大人校正

袖中大和詞大成　寸珍本全一冊　定價金拾壹錢

無益の詞を去り當時用ゐることはを多く增補して附錄ゑ歌の讀方を出く歌學初心の便利の小冊子とす

建綾足大人著　早川廣海大人補

增補歌文要語　小本全三冊　定價四拾五錢

古事記日本記延喜式和名抄萬葉集伊勢うつぼ源氏おちくぼ竹取その他ゑ和書物語等の詞を部類に分ちて註解ぞ加へ出所をりけし信切な書おれは和歌連俳ぞ云ふも更おり和文綴るぞゑ便ぞとおる珍書おり

芭蕉七書　小本全二冊　定價金三拾八錢

此書ハ行脚掟○二十五ヶ條○十六篇○句合○嵯峨日記○奥の細道○發句集等此の七部の蕉翁秘書を合刊ぞて同じ道に遊ぶ人の便とす

芭蕉附合評註　小本全四冊　定價金六拾五錢

翁一世の附合集蓼太の撰らみぞかをーと委しく註解ぞて好者の爲ゑ其意をさてぞやすくぞ

俳諧李寄たね袋　懷中本全一冊　定價金拾八錢五厘

凡ゑ俳諧初心の手引ぞなる書數多ありぞ雖有來にて便少し此季寄本は四季詞草木鳥獸及ひ月の異名年中行事等都て註を加へ俳諧式法發句仕樣附句の用捨其外極秘傳故實ぞ出せし初心必携の書おり

思之中村貞纂述　博愛奥田頼閲正

頭書類語小學作文教授書　小本全五冊　定價金壹圓廿五錢

○初等科(一ノ卷)(二ノ卷)一ノ卷卷首に俗文要語活用問答、令止誤文、俗文復譯法等ぞ掲げ次にB用單簡文百余章ぞ編ハ○二ノ卷卷首に俗語若干ぞ掲げ次に四季贈答文、祝賀、悔吊文、電信文、公用文諸証文等數百章ぞ載す

中等科(三ノ卷)(四ノ卷)(五ノ卷)三ノ卷卷首に作文要字和解ぞ掲げ次ゑ雅文に俗語ぞ挿ぞ僅に三十字內外ぞ以く一文成す○四五ノ卷紀、記事、論、說、題、抜、傳、序、祝文、吊文、祭文等數百編ぞ載ぞ

南泉中村貞著述

製本所

東京麹町区飯田町
山田三十八番地
飯川源七郎

開化農商往來　半紙本全一冊　定價廿二錢五厘

此書ハ農商家の心得日用器具の名目等を掲げ尋常の農商往來と異なり專ら暗誦に便ならんため五七ハ句調ハ綴り且習字にも用ひらるべき筆耕を撰みたれい世ハ兒童一本提携ハて其裨益を賞ハ玉はんとを

西敬著書

畫圖入門　横綴本全十冊　一冊ニ付定價金拾錢

西先生ハ畫學に妙を得らをーを諸君の熟知する處なり今茲ハ贅言せず此書ハ中小學校ハ教則ハ基き編述せる書にして直線法○曲線法○罫畫○紋畫○器用物○家屋○花草○果物○禽獸○人物○等を顯し順序宜きを得彫刻鮮明なるを以て教科用ハ適當なる書と云ふべきなり請ふ世に慢然散布ハる畫學の諸書と同一視そるなく卷を繙て無瑕完璧なる眞書さるを知ハ玉ふべし

西敬纂譯

畫圖入門　幾何畫法　近刻
同　透視法　近刻
同　按影畫法　近刻
同　三部圖式　近刻

此書ハ用器畫則ち幾何畫法投影法透視法等を詳述せる書ハて教科用適當なるを勿論用器畫を畫字中必要の科にーて各府縣教則目ハ此科あるも未だ發兌ハ書を見ざ依ハ教則の順序ハ隨ひ此書を出版す故ハ只教科用のみならず工藝家ハも必讀の書也

鷹嘴屋吉著述

新選普通作文必用　中本全二冊　定價廿五錢

手紙を認めるに解り易き爲同意味の記かへと澤山ハるし萬物の類語文章のイロハ引を載せ日用文を若干掲げる重寶の書也

鷹嘴屋吉著述

新選普通女用文章　中本全一冊　定價拾七錢

此書は婦人郵便はがきの認め易き短文を年始狀を始め種々の雜用に至る迄都く余章を掲げ頭に一々其文の類語を載せ容易に作文を得べき懷中便益の小冊子也